

若手スクールカウンセラーが語り合い、支え合い、 つながり合うことの意味：「スクールカウンセリン グ活動をかたらん会？」活動を通して

安藤， 徹
九州大学大学院人間環境学府

大井， 妙子
九州大学大学院人間環境学府

桑本， 雅量
九州大学大学院人間環境学府

桂木， 彩
九州大学大学院人間環境学府

他

<https://doi.org/10.15017/1448785>

出版情報：九州大学総合臨床心理研究. 1, pp.249-262, 2010-03-01. 九州大学大学院人間環境学府附属
総合臨床心理センター
バージョン：
権利関係：

若手スクールカウンセラーが語り合い、 支え合い、つながり合うことの意味

—「スクールカウンセリング活動をかたらん会？」活動を通して—

安藤 徹*・大井 妙子*・桑本 雅量*・桂木 彩*・樋口 友理*

近年、多くの若手臨床心理士がSCとして教育の現場に参入している。しかし、学校臨床の現場では、多様なニーズが存在しており、SCとしての継続的なトレーニングが不可欠である。そのため、若手SCが主体的に学ぶ場として、互いに支えあいながら若手に乏しいネットワークの繋がりをもたらす活動の充実が求められている。本研究では、平成19年度より始まった若手SC同士で「語り合う」ことを目的とした「SC活動をかたらん会？」の活動について報告し、参加者へ実施したアンケート結果より本活動の意義や必要性、今後の課題について考察した。かたらん会は、若手SCの意欲や素朴なニーズから始まった会であり、主に1年目から3年目までの若手SCで構成されている。活動内容として、月例会やのまん会、外部講師の招聘、SSWとの交流会などがあり、それらを通して、語り合い、相互に援助しあう場、つながりを作り、拡げていく場として捉えられている。また、SC活動の質を高めるための相互に学び合う場としても位置づけられていると考えられた。

キーワード：若手スクールカウンセラー、語り合う、つながり合う

I. はじめに

1. ある若手スクールカウンセラーの雑感

筆者は若手スクールカウンセラー(以下SCと略記)として公立の中学校と小学校に勤務している。どの学校も抱えている問題や置かれている状況は別として、SCの受け入れに対しては「地域や学校によって温度差がある」(村山、2007など)ようにさまざまである。しかし、筆者の印象としては、SCに対する職員室の雰囲気や教職員との関係は非常によいと感じている。これは、前任SCの奮闘や地域の中の他のSCの活躍など、見えない存在や関係性に支えられているのだろう。

一方、そのような雰囲気の良い学校であってもどこか違和感が残る。非常勤などの勤務体制に関するものを除いて、その違和感について内省していくと「教職員とは専門性が異なること(≒多勢に無勢、孤独)」「カウンセラーとして対応するのは自分のみ(≒小さな存在に大きな責任感)」など思い当たる。この孤独感や責任感はSCの専門性である「外部性」を担保するものであろうが、

*九州大学大学院人間環境学府人間共生システム専攻臨床心理学指導・研究コース博士後期課程

それを考慮してもこれらの感覚を軽視してはならないと思う。

この感覚は、学校現場で教員とは異なる専門性を有しており、SCは学校の中での存在感としては小さなものであるという事実からくるものである。そして、SCの存在は学校の諸問題に対する支援の歯車の1つとしてありたい。このように考えると、この違和感は心理臨床家として大切な感覚であり、自然な感覚と考えられる(中島、2006)。この違和感をすりつぶさずに維持しながらスクールカウンセリング活動(以下SC活動と略記)に活かしていくためには、どうしたらよいのだろうか。しかし、このような違和感を内包しながら活動することは簡単なことではない。そのため、まずはこのような違和感に悩み苦しむのではなく、それを感じている自分自身を大切にできる場が必要であろう。そして、これに似た体験をしている他のSCと体験を共有していくことも有効であると思われる。

2. スクールカウンセラーの養成

文部省(現文部科学省)によって導入された学校臨床心理士によるスクールカウンセラー事業は、平成7年から「スクールカウンセラー活用調査研究委託事業」として始まり、概ね好評を得て、平成13年度以降、「スクールカウンセラー活用事業補助」として発展してきた。その後、平成17年度には全ての公立中学校へのSC配置が完了している(村山、2007)。そして現在では、小学校や高等学校への配置が進められている。このような急速な発展に伴い、SCを担う臨床心理士を養成する指定大学院が増加しており、多くの若手臨床心理士がSCとして教育の現場に参入していると考えられる。しかしながら、指定大学院制度においては、学内実習は充実しているものの学外実習はそれぞれの大学院により事情は異なっており、学校というコミュニティで活動していくSCを養成するには時間やフィールドの確保という点からも充実しているとは言い難い。そのため、SC活動を担える臨床心理士を養成するため、ボランティア活動としてのSMS活動(榎谷・増田、2007)などの報告が見られている。このように、学校臨床の現場ではSCとしてのトレーニングが不十分であり、学びながら行っている若手SCが多いと考えられる(大塚・村山・滝口・藤原、2008)。

3. 若手スクールカウンセラー同士が互いに支え合うこと、支えあう場をつくりだすこと

SC活動においては「密室カウンセリング」(田嶋、1995)だけではなく、コミュニティを重視し、学校に則したニーズに応じていく必要があると言われている(鶴養・鶴養、1997;伊藤、1998、2001;田嶋、2001など)。コミュニティを重視する学校臨床において重要なのは、人的・物理的ネットワークと考えられる。公立学校のSCは非常勤職であり、医療や福祉などの他機関での臨床心理業務と兼務している場合が多いと考えられ、それゆえにSC個人が有するネットワークが学校臨床において有効に機能することも少なくない。しかしながら、若手臨床心理士は、ベテラン臨床心理士に比べて個人ネットワークが乏しく、その活動に困難さを有することは明らかであろう。また、コミュニティを重視した援助を行うためには心理臨床に限らない幅広い知識や臨床体験が必要とさ

れており、さまざまな研修会への参加や自己研鑽の必要性が言われている（伊藤、2003）。このように、学校臨床の現場ではコミュニティへの理解とネットワーキングの必要性もあり、若手 SC は多くの研修会に参加し、研鑽を積んでいると考えられる。

若手 SC が学校臨床心理士全体研修会や都道府県単位の研修会などさまざまな研修会に参加することは、知識や技能の習得の場に止まらず、出会いの場やネットワークを形成する場、また若手 SC 同士が活動を語り合うことを通したピアサポートに似た場ともなっていると考えられる。このように、若手 SC にとって、個人レベルでは少ないネットワークを共有し、拡大することがお互いの活動を支えるものとして不可欠なことを示唆している。

しかしながら、一人職場である SC が、多くの研修会に参加し、ネットワークとして機能するつながりを獲得していくには多くの時間がかかると考えられる。年齢や経験といったものだけではなく、つながりとなる場や関係性の醸成には時間がかかるのである。また、機能するネットワークの構築には、他専門家との連携が挙げられるが、その前に同職種の専門家との人間的なつながりが必要であることは言うまでもない。

そのため、知識や技能の習得に重心を置くものだけではなく、若手 SC が主体的に学ぶ場として、日々の活動の不安や苦勞、楽しさを分かち合い、互いに支え合いながら若手に乏しいつながりをもたらし活動の充実がより求められている。

以上のことから本稿では、若手 SC を中心に立ちあがったグループである「スクールカウンセリング活動をかたらん会？（以下：かたらん会と略記）」について報告したい。また、参加者にアンケートを実施しその結果をもとに本活動の意義や必要性、今後の課題について考察する。そして、報告を通してさらなる活動の充実や発展を考えていく端緒としたい。

Ⅱ. 「スクールカウンセリング活動をかたらん会？」の概要

1. 活動の経緯

博士後期課程になると大学院附属相談室での臨床だけではなく、医療や福祉、教育の現場で臨床実践を行うものが多く、SC として活動している者も少なくない。その中で、次第に「スクールカウンセリングについて語り合う場を作ろう」との声が自然に上がっていった。そこで、同じく SC 活動を行っており、普段の生活の中でも話し合いをよくしている者たちが集まり、平成 19 年度より「語り合う」ことを目的とした「かたらん会」の活動が始まった。

2. 活動の概要

本会の概要は以下の通りである（表 1）。参加者は全員が博士後期課程の大学院生であり、現在 SC として活動を行っている者である。SC 経験年数は 1 年目から 8 年目まで含まれているが、主に 1 年目から 3 年目までの若手 SC で構成されている。また、SC としての活動場所（SC 勤務校）が近隣 4 県にまたがっていることも特徴としてあげられる。本会は、月に一回、参加者の集まり

のよい日に設定され、参加者専用のメーリングリスト及び相談室の掲示によって参加が呼びかけられる。本会の参加は自由であり、都合のよい時間だけ参加することも許可されており、研究会よりサロンに近い雰囲気である。会ではお茶やお菓子が自然に持ちよられ、床に寝転がる者やおもちゃと戯れる者、プレイセラピーのような関係遊びが開始されることなどもあり、自由闊達で非常にアットホームで緩やかな時間が流れる。参加人数はその月によって異なるが5名～10名程度となっている。

表1 かたらん会の概要

日 時	月に1回程度、人数が集まる日時
場 所	大学の空いている部屋（広めのプレイルームがよい）
時 間	1時間半～2時間
参加者	スクールカウンセリング活動を行っている者
内 容	特に決められておらずその日の雰囲気や状況など参加者の必要に応じてなされる。 日々の活動を語り合うことやそこからケース検討となることもある。 時にプレイルームならではの活動が行われる。

表2 かたらん会活動の展開

1年目	のまん会（懇親会）
2年目	スクールソーシャルワーカーとの交流会 学内の他の研究会と合同での外部講師を招聘した研修会 （かしまえりこ先生：スクールカウンセラーの学校での動き方）
3年目	かたらん会メンバーでのグループスーパービジョンの依頼

3. 活動の展開

本会が活動を始めてから、3年の年月が経過している。アットホームな雰囲気ですごく、基本的に参加者のニーズや日々の実感、興味関心に沿った活動を行ってきた。それゆえ、その時々々のニーズに合わせたさまざまな活動の展開が見られる（表2）。

Ⅲ. 「スクールカウンセラー活動をかたらん会？」の実際

以下に活動の実際を展開に沿って述べる。

1. かたらん会月例会

ある月例会の風景

かたらん会の時間になると、三々五々プレイルームにメンバーが集まってくる。お茶とお菓子を持参のメンバーがいたり、ぬいぐるみを抱えてみたり、いつの間にか卓球が始まることもある。忙しい日常から離れたほっとできるひとときである。

このようなのびやかな雰囲気の中、やがて1人のメンバーが語り始める。「実は学校でこんなことがあって…」すると、「私もそうだったけど、こんな風にしてみたよ」、「オレも…」と次から次へと共感していることや自分のやっているちょっとした工夫のアイデアが飛び出す。この間も、ぬいぐるみに触れているメンバーがいたり、寝転びながら話に加わるメンバーもいたり、とてもゆるやかな空気が流れている。カンファやSVに出すにはためらいがあるような悩みや、本当に些細な悩みでも、ここでは気軽に話すことができる。同じような立場で、同じように悩んでいるということが、メンバーにとって心地よく、元気が出てくるのである。

あるメンバーが「若手でも、がんばっているという姿が見えるスクールカウンセラーは学校の先生方の満足度が高いという結果が出ている」と話すと、メンバーたちは元気が出てきて「明日からの臨床活動もがんばろう」と思えるのだった。

かたらん会月例会の内容

以上はある回の様子を記述したものである。かたらん会の月例会では、時間と場所が設定されており、その時間くらいにぼちぼちと集まってくる。そこでは、時間に縛られず、だいたいの人数が集まり、そろそろ始めた方が良い雰囲気になると誰かが話しだし、会が進行する。特に発表者を決めるわけでもなく、話したい人が話したいことを話し、そこに参加者が思い思いを語っていく。これまで、①ケース検討、②研修会の報告、③緊急支援の勉強会、④講話の準備、⑤愚痴、⑥将来への不安等が語られた。何の準備や用意もなく、お茶を飲みながら思い思いを語る回もあれば、レジュメを用意して検討をし、次回に持ち越すという回もあった。それらは、その時その時の参加者のニーズに応じていくものが取り扱われていたと考えられる。月例会で中心となるのは、それぞれの勤務校で起こるいろいろなことであり、ケース検討に似たものが多かった。しかし、「ケース検討」という言葉でイメージされるものに比べると、困ったことを話し、共感し、どうしたらよいかを皆で考えるといったものであり、検討の自由度は高いと思われる。

2. のまん会

かたらん会の延長として、数回「のまん会」が実施された。のまん会では、お酒を飲みながら、それぞれのやりがいや苦労、非常勤職であるSCの将来について語りあうことができた。SCとして活動していくことに希望ややる気を持つてはいるものの、単年度契約であり、今後の未定な事業であるため、日々の活動に影響がでていのではないかとといった不安など、理想ではなく、現実的な問題について真摯に語り合い、お互いを支え合うことを誓った。また、かたらん会の新たな展開として、共にカラオケでストレスを発散する「うたわん会」も企画されている。

3. 外部講師の招聘

2009年2月27日（金）19:00～21:00、九州大学の臨床心理学のコースの先輩にあたる、かしまえりこ先生を学校臨床研究会と共催でお招きし、「SCの学校での動き方」というテーマで、講話をしていただいた。

当日は SC だけではなく、学校臨床に興味がある大学院生 30 名が参加した。まず講師である、かしま先生から講話や学校臨床に関するビデオ上映があり、その後、質疑応答がなされた。内容は SC 活動に限らず、学校臨床における現場への入り方など基礎的でありながらも学校の中で機能していくための基盤となる講話であった。質疑応答では講話に関する内容に限らず、各自が学校現場の中での率直な悩みや戸惑いも出された。講話や質疑応答などで各自の体験が賦活されていくという非常に刺激的な時間となったようであった。

4. SSWとの交流会

2009 年 1 月 24 日（土）14:00～17:00 に、福岡県内の中学校に勤務しているスクール・ソーシャルワーカー（以下 SSW と略記）4 名をお招きし、筆者ら SC 8 名と共に、交流会を行った。かたらん会メンバーの 1 人が勤務する中学校である SSW と知り合い、親交を深めていたことがきっかけであった。SSW および SC 双方の交流会に対する要望をもとに研修内容を考え、表 3 のように設定した。交流会の中では、SSW、SC 共に率直な疑問や意見を出し合い、ディスカッションを重ねる中で、お互いの考え方や姿勢に関して、理解を深めている様子であった。なお詳細の活動については別の機会にゆずりたい。

表 3 SSW および SC 交流会の流れ

-
1. 交流会の趣旨の説明&自己紹介
 2. SC 活動の紹介
 - 1) SC 活動の概要と 1 日
 - 2) SC がかわる事例
 3. SSW 活動の紹介
 - 1) SSW 活動の概要
 - 2) SSW の 1 週間
 4. ディスカッション
 5. 懇親会
-

5. かたらん会メンバーによるグループスーパービジョン

外部講師としてお招きした、かしま先生にスーパービジョンを受けたいという声が上がりに、平成 21 年 7 月に、かたらん会メンバー 6 名で初回のグループスーパービジョンを受けた。今後も引き続き、月に 1 回程度、スーパービジョンを受けていく予定である。

IV. かたらん会参加者へのアンケート

1. アンケートの実施とKJ法による分類

- 1) 対象者：かたらん会に参加した経験のある者 10 名

若手スクールカウンセラーが語り合い、支え合い、つながり合うことの意味

表4 かたらん会月例会の感想：カテゴリ名と具体的記述例

〈本音でつながることができる場〉
【本音の場】
様々な想いをぶちまけたり聞くことができたり本音で語らうことができる場 お互いの苦労話ができただのもよかった
【相互援助】
ちょっとした疑問を出したときに他のメンバーが支持的にこたえてくれるのでためになった 困っている状況について話した際はみんなで知恵を出し合うとてもいい雰囲気があったように思う 少人数で情報交換がしやすかった
【初心者同士の場】
初年度で分からないことが多かったため疑問に対して意見をもらえて参考になった。
〈それぞれが自由にゆっくりと過ごす体験〉
【癒し】
ざっくばらんに話せるのでそれだけでメンタルヘルスによい ちょっといやされました
【安全・安心感】
語りたいことは何を語ってもよいし語りたくないことは語らなくてもいいことが保障されている場
【場のゆるやかさ】
雰囲気が和やかで話が進む感じ 楽しい、楽な感じでリラックスできる ゆるやかで主体的な学習の場
〈自分自身の活動を振り返る〉
いつもの活動の振り返りやちょっとした活動の意味を考える 他の人の動き方や入り方が勉強になるときがある 自分の中で整理されていなかった経験が語り合ったり質問され答えることで整理されていった
〈必要な場所〉
居場所として必要 SC活動の空母的存在

注：【 】はカテゴリ、〈 〉は大カテゴリ

表5 かたらん会でのケース検討の感想：カテゴリ名と具体的記述例

【ケースの“距離”の近さ】
発表者の事例をより疑似体験的に体験できやすかった 「そうよねー」と共感しやすい 似たような事例やエッセンスは大事だなあと思うので参考になる
【率直な意見交換】
相談室カンファのような場ではなくそれぞれが連想したことを率直に語らうことができる
【SC活動に特化した検討】
学校現場をわかっているメンバーなので検討しやすい 学校という枠でのケース検討ができたことはよかった 学校臨床の事例化していく視点、複数の援助対象がある中で“つなぐ”視点など勉強になった
【自分自身の活動の振り返り】
自分の経験を少しは人の役に立つよう使える場だった 後輩の話を聞いて初心に戻れました

表6 SSW との交流会の感想：カテゴリ名と具体的記述例

【交流の喜び】
まず交流できて嬉しかった 役割を超えた交流ができた 教育現場に新たに入ってきた SSW と懇談会のような形でいろいろお話を聞けたことは貴重だった
【本音での交流】
講話という形ではなく座談会という形で緊張したり構えたりすることもなく本音で話せたのがよかった 実際の活動や SSW の本音が聞けてよかった
【SSW の視点の理解】
SC と SSW の視点の違いが興味深かった 仕事の仕方、視点などについての視点を学べた
【SSW への理解の深まり】
SSW のことを全くわかっていなかったのが勉強になった SSW も SC も共に情熱をもって活動してるんだととても分かった
【今後の SSW との協働イメージ】
ネットワークを作ったので今度は使いたい どういったケースを SSW と連携すればいいのかわかってよかった いつかうまく協働ができるようになったらいいと思う
【かたらん会の拡がり】
かたらん会がひろがった感じ

表7 かたらん会の場の意味：カテゴリ名と具体的記述例

【集いの場】
同職種間でわかりあえたり助け合えたりする場 1人職場なので所属感をもてる場 お互いの苦労話、大変な話がきけたのは1人で活動する SC にとってはよかった気がします ベンチ的なところ
【体験を分かち合い、互いに支え合う場】
初心者同士で互いに支える場 ピアサポートの場所だった きつい思いをして奮闘しているのは「自分だけじゃないんだ」と思える場
【自然体になれる場】
雰囲気ゆるいので自然 リラックスした感じで参加できる 大学での生活の息抜きにもなっています
【活動の振り返り・整理】
これまで自分の中で整理されていなかった経験が語り合ったり質問され答えることで整理されていった PC のデフラグみたいな感じ
【学びの場】
若手専門家が肩の力を抜いて本音で語り合い支え合って共に主体的に学んでいく場 活動がいろいろ発展してすごいと思う
【必要な場所】
1つの居場所 SC 活動を続けているうちは毎回参加したいし、SC としての活動が終わっても顔を出したいような場 このような場があって本当によかった

若手スクールカウンセラーが語り合い、支え合い、つながり合うことの意味

- 2) 調査期間：2009年7月初旬
- 3) アンケート項目：①かたらん会月例会の感想、②ケース検討の感想、③かたらん会がどのような場所であったか、の3点について自由記述による回答を求めた。なお、ケース検討は月例会の中の主要な活動の1つとして考えられるが今回は月例会とは別にケース検討の感想を求めることとした。
- 4) 分析：各対象者が挙げた記述を内容ごとに1枚のカードに転記したところ、①は22枚、②は11枚、③は24枚のカードがそれぞれ作成された。このカードを現在SC活動をしている臨床心理士資格を有する者3名でKJ法（川喜多、1967）に基づいてカードの分類・整理を行った。
- 5) 結果：①は〈本音でつながることができる場〉、〈それぞれが自由にゆっくりと過ごす体験〉、〈自分自身の体験を振り返る〉、〈必要な場所〉の4つの大きなカテゴリにまとめられた。〈本音でつながることのできる場〉は【本音の場】、【相互援助】、【初心者同士の場】の3つのカテゴリから構成されている。〈それぞれが自由にゆっくりと過ごす体験〉は【癒し】、【安全・安心感】、【場のゆるやかさ】、の3つのカテゴリから構成されている。②は【ケースの“距離”の近さ】、【率直な意見交換】、【SC活動に特化した検討】、【自分自身の活動の振り返り】の4つのカテゴリにまとめられた。③は【集いの場】、【体験を分かち合い、互いに支える場】、【自然体になれる場】、【活動の振り返り・整理の場】、【学びの場】、【必要な場所】の6つのカテゴリにまとめられた。

V. 考察

点から線へ、そして面へ

かたらん会の1つの大きな特徴として、日ごろの関係性があったからこそ始まった活動であり、かつ若手SCの意欲や素朴なニーズから始まった活動であることが挙げられよう。良好な関係性をもとに自然体でいられるような安心・安全な場の雰囲気があり、さらに参加者の意欲が喚起され、外部講師の招聘やSSWとの交流会などの活動の展開が自然な形で見られたものと考えられる。つまり、若手SC同士という内側のネットワークを構築するきっかけや場がつくられ、そこでの深まりがあり、外部講師やSSWなどの若手SCを超えた外側のネットワークへ拡げていったと言える。これらを考察の手がかりとしていきたい。

1. 若手スクールカウンセラーが語り合い、支えあうこと

アンケートの結果より、かたらん会は、“互いに支え合う”場として体験されている側面が強いと考えられた。中島（2003）は、“相互支援グループがピア・グループとしての効果をもつためには、①本音と言える場であること、②モデルが得られること、③人間関係のサポートが得られること、④自分自身がグループに貢献していると実感できることが重要な要素である”（数字は筆者らが追加）と述べている。ここでは、各要素に沿って詳しく見ていくことにする。

まず、①“本音と言える場であること”に該当するものは、〈本音でつながることができる場〉の下位カテゴリー【本音の場】に見られた。“大変さを吐き出せる場”、“お互いの苦労話ができる”という感想から、学校現場に入った際の苦労や大変な想いを率直に分かち合う場であったことがうかがえる。初心のSCにとって、学校の雰囲気慣れ、自らの存在を知ってもらい、教師と信頼関係を築き、相談体制の一部として機能し、専門性を失わずにケースに働きかけることができるようになるまでは、多大な心身のエネルギーが必要とされる。困難な状況に遭遇し、孤独感や無力感に苛まれることも少なくない。こういったネガティブな想いを安全な場で共有できることは、自らの体験を受け入れることにつながり、その後の臨床活動に向き合っていく力となるのではないかと考えられる。次に、②“モデルが得られること”に関しては、〈自分自身の活動を振り返る〉に見られた。ここでは、“初年度で分からないことが多かったため、疑問に対して意見をもらえて参考になった”、“他の人の動き方や入り方が勉強になるときがある”等、見られた。公立中学校に配置されるSCは、基本的には一人であり、他のSCの動き方について知る機会に乏しいと思われる。しかし、新しいSCが、学校に根付いていく過程においては些細な疑問や戸惑いが生じやすい。そのため、他のSCの動き方を知り、参考にすることができる場があることは、貴重なことではないだろうか。また、こういった体験は、自らの体験を振り返り、整理する機会ともなり、自らが勤務する学校での体験を相対的に位置づけ、理解を深める場となっていると言えるだろう。

さらに、③“人間関係のサポートが得られること”、④“自分自身がグループに貢献していると実感できること”は、まとめて見ていくことにしたい。これに関しては、〈本音でつながることができる場〉の【相互援助】に見られた。その具体的な中身には、“ちょっとした疑問を出したときに、(中略)支持的に答えてくれるのでためになった”、“みんなで知恵を出し合うととてもいい雰囲気があった”が挙げられていた。困っている事柄に関して知恵を出し合うという道具的サポート、また、それを抱えるメンバーの想いに支持的に受容するという情緒的サポートの両側面が含まれていると考えられた。これは【場のゆるやかさ】があり【安全・安心】が守られる中で【癒し】を得ることにつながっていたと言えよう。

SC活用事業開始当初とは異なり、現在は臨床経験の少ない若手がSCとして配置されていることが多い(大塚・村山・滝口・藤原、2008)。熊倉(2004)は専門家が新しい組織に関与するときには「私に何ができるのだろうか」と不安になると述べ、専門家として人的ネットワークに入ることは内なる不安との闘いであると述べた。このような現状の中でまず、若手自らが同じ若手のSC同士がつながるきっかけをつくる場をつくったこと自体にも非常に意味があると考えられる。これは柏村・安部(2004)は初心者SCが研修会に参加し、その中で同じ職種の仲間と出会い、体験を話し合えること自体が非常に重要であるとの指摘にも重なるところである。困っていることについて気軽に相談し、仲間同士で援助し合える場所があることは、既存の研修やスーパービジョンを補うものであり、若手SCのニーズを反映したものであると考えられる。串崎(2005)は“信頼できる仲間とのあたたかい関係は、心理療法を学ぶ際の豊かな土壌になる”と述べている。かたらん会は元々、参加者同士に良好な関係性があったところから生まれてきたものでもある。そのよう

な関係性も土台となり、かたらん会が〈本音でつながることができる場〉であり、そこに〈それぞれが自由にゆっくりと過ごす体験〉があったと言える。そしてそこから参加者同士が仲間としてつながりをさらに深めていくことで〈必要な場所〉となり、それが“学びの土壌”となっているのではないだろうか。

2. 内外のつながりを深め、広げること

SSW との交流会では“まず交流できてうれしかった”という【交流の喜び】があり“(略) 座談会という形で(略) 構えず本音で話せた”という、かたらん会に似たような雰囲気がうかがわれた。SSW との交流会は参加者のニーズや意欲から生まれたものであった。これを加味して考えるとかたらん会という“SC 活動の空母的存在”があり、内側のネットワークの深まりがあった上でのSSW との交流があったと考えられる。そうであったからこそ参加者個人のネットワークに留まらない【かたらん会の拡がり】になったのではないだろうか。

SSW との交流会では【本音での交流】を通して他職種としての【SSW の視点の理解】や【SSW への理解の深まり】が見られ、さらに【今後の協働イメージ】が賦活されていることがうかがわれた。SC 活動ではネットワークの重要性が指摘されている(田嶋、2001; 平野、2003 など)が、若手は臨床経験が少なく、ネットワークも乏しいことが多い。そのような中でこのような外部の人的ネットワークをつくることができたことはSC 活動のさらなる充実に資するものであると考えられる。

3. 互いに学び合い、高め合う必要性

これまで見てきたように、かたらん会活動は、語り合い、相互に援助し合う場、つながりを作り、広げていく場として捉えられることが示された。この他の重要な意味として、相互に“学び合う”場として位置づけられるだろう。かたらん会の月例会の中では、メンバーが強い関心を持っている、学ぶ必要があると感じているテーマが自然と持ち込まれ、共有する中で各々のメンバーが学びを深めていった。特に、ケース検討を行う際には、表4の感想に見られたように、“学校現場をわかっている現場なので検討しやすい”とSC 活動に特化した検討をじっくりと行うために、“発表者の事例をより疑似体験的に体験できやすかった”といった、発表者と近い距離でケースと向き合える感覚を持って臨むことが可能となることが伺えた。林(2008)は、臨床心理士会による学校臨床心理士への支援や研修体制に関して述べた上で、その課題として“研修に関しても、義務的参加ではなく、自発的・主体的な取り組みが促されるようなシステムが必要となろう”と述べている。各自の関心、現場の要請に合わせて、学ぶ機会を創り出していくことは、それ自体が貴重な営みであり、SC 活動の質を高めていくためには不可欠であると考えられる。

Ⅵ. 今後の課題

かたらん会は日ごろの関係性を元に活動を開始し、展開している活動であるとも言える。今後、参加者の入れ替わりと共にどのような変化や展開が見られるかは今後の課題とも言えるだろう。また、当然のことながら若手 SC の中には大学院に在籍しておらずこのような場が少ない SC も多く存在していると考えられる。これは SC 事業全体の課題であるとも言えるが、かたらん会の中でもどのような形で活動を維持・展開していくのか今後の課題であり、かつ新たな 1 つの展開となりうると考えられる。

Ⅶ. おわりに

学校臨床は難しい。専門性の違う現場へ、多くの若手が飛び込み、孤軍奮闘頑張っている。しかし、そこには臨床家として大きな学びや喜びがあるのだろう。不安定な勤務形態や職務の不明確性が上げられながらも多くの臨床心理士が継続を希望し、熱心に活動している事実がそのことを物語っている。学校臨床は難しい。若手には荷が重いかもしれない。しかし、臨床心理士の多くは若手であり、潜在的な力を有していると信じたい。先達が切り拓いてくれたこの学問と臨床現場を大切に、より発展させていくには若手の力を結集させていくことが不可欠であろう。難しい中に喜びを見つけ、更なる高みに向けて、若い臨床心理士がお互いを支えていくことが大切なのである。そして、今日も子どもと教師が待っている学校へ向かうことができるのだろう。

謝 辞

本稿を執筆するにあたり、ご指導いただきました、九州大学大学院人間環境学研究院 田嶋誠一教授、同 増田健太郎准教授に心より御礼申し上げます。また、「かたらん会」の活動にご理解とご協力をいただきました、かしまえりこ先生、SSW の先生方にも感謝申し上げます。「かたらん会」を通して支え合い、活動を共にしたメンバーの皆様、ありがとうございました。

文 献

- 平野直己 2003 児童生徒へのアプローチ 伊藤美奈子・平野直己(編) 学校臨床心理学・入門
スクールカウンセラーによる実践の知恵 有斐閣 105-126
- 林 幹男 2008 学校臨床心理士会を支える臨床心理士会活動の現状と課題 藤原勝紀(編) 現代のエスプリ別冊 教育心理臨床パラダイム 159-163
- 柏村雪子・安部順子 2005 スクールカウンセラー・キャンディデイトの研修に関する一考察：
西九州大学大学院における卒後教育 永原学園西九州大学・佐賀短期大学紀要 35、45-51

若手スクールカウンセラーが語り合い、支え合い、つながり合うことの意味

- 川熊倉伸宏 2004 メンタルヘルス原論 新興医学出版会
- 川喜多二郎 1967 発想法：創造法開発のために 中央公論社
- 串崎幸代 2005 ケースをもつまでの臨床教育 鑑幹八郎（監修）・川畑直人（編）心理臨床家のアイデンティティの育成 創元社 39-48
- 榎谷樹奈・増田健太郎 2007 小・中学校におけるスクール・メンタルサポートの試み 九州大学心理臨床研究 26
- 村山正治編 2007 学校臨床のヒント SCのための73のキーワード 金剛出版
- 中島 恵 2003 スクールカウンセラーの相互支援グループ 伊藤美奈子・平野直己（編著）学校臨床心理学・入門 スクールカウンセラーによる実践の知恵 有斐閣アルマ
- 中島義実 2006 スクールカウンセラーとしての導入期実践－基盤となる発想を求めて－ 風間書房
- 大塚義孝・村山正治・滝口俊子・藤原勝紀 2008 教育支援における学校臨床心理士の意義を考える 藤原勝紀（編）現代のエスプリ別冊 教育心理臨床パラダイム 9-34
- 鶴養美昭・鶴養啓子 1997 学校と臨床心理士－子育ての教育を支える－ ミネルヴァ書房
- 田嶋誠一 1995 密室カウンセリングよどこへ行く 教育と医学 43-5、26-33
- 田嶋誠一 2001 事例研究の視点－ネットワークとコミュニティ 臨床心理学 1 (1)、67-75、金剛出版

**The meaning of talking, helping and networking each other for young school counselor
-through the activity of “katarankai”-**

Toru ANDO, Taeko OHI, Masakazu KUWAMOTO, Aya KATSURAGI, Yuri HIGUCHI

Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University

For the enhancement of the activity that brings the connection of the network where the young man is scarce, young SC started the activity of “Katarankai(Meeting that talk about the SC activity)?” to aim at “Talk”. In this study, it reports on the activity of “Katralkai. The questionnaire was executed to the participant, and it was considered the meaning of this activity, the necessity, and the problem in the future on the result. “Katarankai” is a meeting that started from a desire of young SC and simple needs, and it is composed of young SC from chiefly year 1 to year 3. As a content of the activity, there are “monthly meeting”, “Nomankai(a party)”, the visiting lecturer’s invitation, and an exchange association with SSW, etc. This activity makes the place that talking and helped between each other, and is caught as an expanded place through them. Moreover, it was thought that this activity was located as a place learn each other to improve the quality of the SC activity.

Key words : young school counselor, talking, networking